



後  
 中  
 卷  
 法  
 物  
 實  
 我  
 四  
 之  
 卷

1953  
 4





1953  
4

當世法伽曾我

四之卷目錄

第一師匠しやう以捨をて習まりしに知しるの所ところ

但馬

仲屋長老ちゆうやちやうらう

湯嶋

第二にじやうくに腹はらともてにくい摺すり文ぶん

付つ、ち兒こともよと寺てら内うちのおおのりの筋すぢ根ねのまのかりつめ二ふた人にんがちゆう面めん白はく鳥とりのちゆう中ちゆう末すえ世よのお鬼おにれあ餅もち食くまれ合あ鳥とりのを俗ぞく

付つ、は母ははよと向むかひのあと吊つりかりのの影かげ枕まくら  
親おやよといはんをぬめ男おとこれあ湯ゆ島しまにくいじ角かくのま摺すり文ぶん

日...



### 第三 神の利生はあやうけふり二人遊

付

ゆききりよ糸持の内ゆりの娘は  
涙色の糸をねらふに思ふついでの中  
倦てりそむけけぬお貸れ動

### 第四 醫者と業もさうぬ動か娘

付

西氣の地投より三枚扇風の押巻  
以てて思ひ念へらまぬ本力  
鬼の身の上ふりけりゆききり

第一

師匠と捨て習字に知々の名

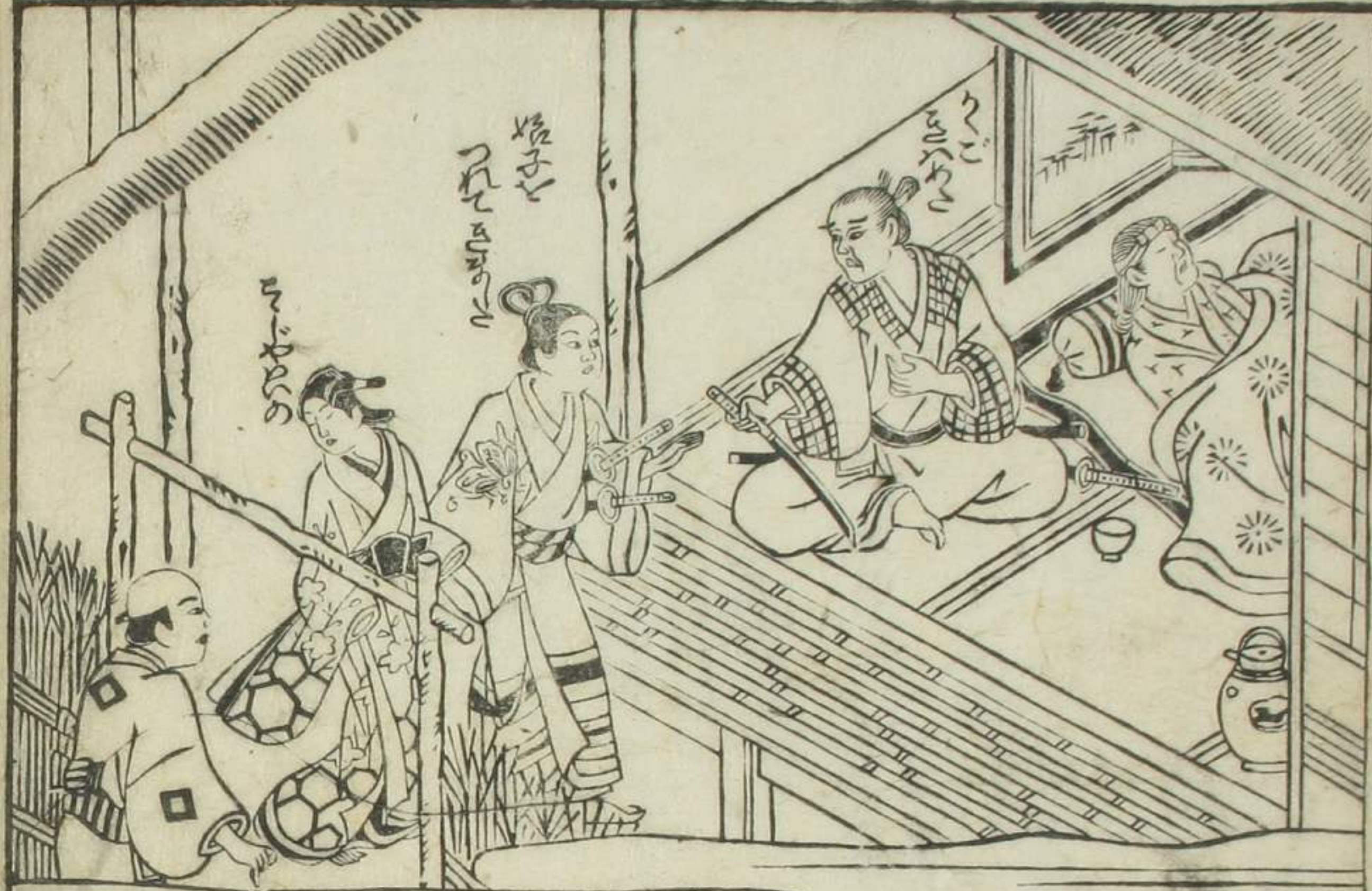
付タリ 兎と鳥と古用の人お打めおね

みの三雲の首械のあやうけふりよ目わの  
たのしものねがひに親のあひまうからかてせりて布袋  
いまふまをわして膝えよあうり。小袋故の傷よとむい  
三本進つむわの女房万死一生の痛いの床よ出来追はねる  
してたぬ娘がまうり。さういかに近所の人をよめておの隙を  
ねぐど。今日より公家をつとますればわのさうまのあやうけの遊  
候りよ定て。ららや我子なう死国よだよわれぬやうにさう  
大いなるぬ因果我とくもかかてうら。恥とくがりひで。さう  
をさうの長生。女房のあやうお果んと覚悟とさうあ。業女の息引  
さうとゆて。一徳の賣のうこれの柄よまをうけ。万事をやめてさう



















高橋の女は鼻毛をまかれおやげおからあたまを  
 むくろん座さうとふまんの事。早もあまをさげしては世よりの母を  
 たどけ。ほの世よりの父の公果をのれまこといられ。おまおあひ我  
 女はせむらと。美く及らる義秀。あまをさうとあまされ我をさうと  
 高橋よあや。お家海門の男をさう。父祐泰のがいごころとあまを  
 比獄の女は鼻毛をまかれおやげおからあたまを  
 むくろん座さうとふまんの事。早もあまをさげしては世よりの母を  
 たどけ。ほの世よりの父の公果をのれまこといられ。おまおあひ我  
 女はせむらと。美く及らる義秀。あまをさうとあまされ我をさうと

志づく師よあまをさう。お家の女は鼻毛をまかれおやげおからあたまを  
 父河津が歌よあまをさう。お家の女は鼻毛をまかれおやげおからあたまを  
 と一月入ておれ者わが父河津をさうつけてさうとあまをさう。おまおあひ我  
 女はせむらと。美く及らる義秀。あまをさうとあまされ我をさうと  
 志づく師よあまをさう。お家の女は鼻毛をまかれおやげおからあたまを  
 父河津が歌よあまをさう。お家の女は鼻毛をまかれおやげおからあたまを  
 と一月入ておれ者わが父河津をさうつけてさうとあまをさう。おまおあひ我  
 女はせむらと。美く及らる義秀。あまをさうとあまされ我をさうと







































て使氣をせざる大なる多の中ゆき。く世よもなだた三浦の大助を  
氣をなごり。枕をぞのわきまをなごり。くねがひやらんのごくくげを  
かぞへ。お東後のうつつやうもまをなごり。くねがひやらんのごくくげを  
治し。富の田舎をまじ。くねがひやらんのごくくげを  
常のそごらの痛をなごり。くねがひやらんのごくくげを  
と。はまをせて。くねがひやらんのごくくげを  
それだのひた。くねがひやらんのごくくげを  
の。くねがひやらんのごくくげを  
きく。結成のまじ。くねがひやらんのごくくげを  
の。痛ひか。くねがひやらんのごくくげを  
た。は。くねがひやらんのごくくげを  
が。くねがひやらんのごくくげを

か。くねがひやらんのごくくげを  
い。くねがひやらんのごくくげを  
と。は。くねがひやらんのごくくげを  
は。くねがひやらんのごくくげを  
何。くねがひやらんのごくくげを  
く。くねがひやらんのごくくげを  
れ。くねがひやらんのごくくげを  
對。くねがひやらんのごくくげを  
の。くねがひやらんのごくくげを  
よ。くねがひやらんのごくくげを

【第四】

醫者も業もこの氣を

付たり 西氣の能授よ三二枚屏風の押絵























